

大学体育受講者のパーソナリティと 社会人基礎力得点の関係

佐藤 和¹, 引原有輝¹, 金田晃一²

¹千葉工業大学創造工学部, ²千葉工業大学先進工学部

要 旨

大学教養体育において、効果的に協同型学習を導入することで社会人基礎力が向上することが報告されている。協同型学習の有効性は、学習者のパーソナリティに大きく影響を受けることが指摘されている。しかし、社会人基礎力の評価とパーソナリティの関係性に関する報告は見当たらない。そこで本研究は、パーソナリティ検査の自己評価と社会人基礎力の自己評価得点の関係性に関する基礎資料を得ることを目的とした。本研究の分析対象者は、受講学生359名であった。本研究では、はじめに分析対象者の各パーソナリティ因子得点と各社会人基礎力能力要素得点の相関関係を確認した。その結果、パーソナリティ因子の「外向性」「良識性」「知的好奇心」は12能力要素と、「協調性」は10能力要素（課題発見力と計画性を除く）と有意な相関関係が認められた。次に、各パーソナリティ因子が社会人基礎力得点に及ぼす影響を検討するため、社会人基礎力3能力の得点を従属変数、パーソナリティ得点を独立変数として重回帰分析を行った。その結果、パーソナリティ主要5因子得点は、3能力得点を適度に予測可能であることが示された ($R^2=.27$ to $.37$)。また、本研究において、「前に踏み出す力」へは良識性、外向性、知的好奇心が有意な正の影響を与えており、中でも良識性の寄与度が高かった。また「考え抜く力」へは、知的好奇心、良識性、外向性が有意な正の影響を与えており、中でも知的好奇心の寄与度が高かった。一方、「チームで働く力」へは良識性、協調性、外向性、知的好奇心が有意な正の影響を与えていたが、各変数の寄与度は近似していた。しかし、「前に踏み出す力」と「考え抜く力」へは情緒安定性が有意な負の影響を与えていた。これらの結果より、主要5因子パーソナリティ特性と社会人基礎力との関連性が示唆された。今後、パーソナリティ特性と大学体育授業受講前後による教育効果の関連性を検証する必要がある。

キーワード

社会人基礎力, パーソナリティ, 協同型学習

責任著者：佐藤 和 Email: yamato.sato@p.chibakoudai.jp

緒 言

大学設置基準の大綱化(1991年)の際、大学体育は「健康教育効果が期待できない」「理論と実技が乖離している」「高校の繰り返しである」などの様々な点から批判され(篠田, 2003), 多くの大学は選択科目となった(笹原ほか, 2006)。それ以降、大学体育の存続意義が大きな課題として議論され、近年様々な大学体育の授業効果が報告されてきている(身体的効果: 林・宮本, 2009; 山内, 2016; 石倉ほか, 2017, 精神的効果: 内田・神林, 2006; 野口ほか, 2015; 須崎・杉山, 2017, 社会的およびライフスキルへの効果: 東海林ほか, 2012; 東海林・島本, 2017; 中澤・上野, 2016)。そのような中、大学教養体育の受講により社会人基礎力が向上されるという報告が蓄積されてきた(石道ほか, 2015, 2016, 2017; 引原ほか,

2016; 金田・引原, 2018; 金田ほか, 2020)。

社会人基礎力とは、「職場や地域社会で多様な人々と共に仕事をするうえで必要な基礎的な能力」であり、前に踏み出す力(アクション)、考え抜く力(シンキング)、チームで働く力(チームワーク)の3つの能力と、それらをさらに細分化した12の能力要素(主体性、働きかける力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力)から成る(経済産業省, 2006)。これらの能力要素は、主に学生の自発性、積極性という能動的な態度や、意見や立場の異なる他者と協同して課題を探し、達成していく力やその過程で経験する対人的相互作用、すなわち言語的、非言語的コミュニケーションを図れる力であると推察される(引原ほか, 2016)。大学教養体育に

おける社会人基礎力への効果に関して、石道ほか (2016) は、受講生に社会人基礎力が高まる振る舞いを積極的に行うように指示し、授業後に振り返りと自己評価を実施させる体育実技授業の受講前後で社会人基礎力調査を行った。この報告では、社会人基礎力3能力のうち「前に踏み出す力」および「考え抜く力」が受講後に有意に向上したが、「チームで働く力」の有意な向上は認められなかった。また、飯田ほか (2016) は、各回授業終了後に、グループによる授業振り返り作業および感想記述を実施することで、社会人基礎力12能力要素の2能力要素(実行力および課題発見力)の有意な向上を報告した。一方で、学生が主体的に教え合い、学び合う対人相互作用を意図した課題解決型の授業運営では、特にネット型スポーツ種目を教材として扱う場合および実施形態を集中授業形式で行う場合において社会人基礎力全能力要素の有意な向上が報告されている(引原ほか, 2016; 金田・引原, 2018; 金田ほか, 2020)。これらの先行研究から、大学教養体育授業を受講することで社会人基礎力の向上を期待できるが、能動的な学習を重視しチーム・グループで協働して教え合うチーム基盤型学習法(TBL: Team-Based Learning; 尾原, 2009; 中越ほか, 2014)や解決過程で何を学んだか、どのように協働できたかを重視する問題解決能力養成型学習法(PBL: Problem-Based Learning, Project-Based Learning; 溝上, 2007; 中越ほか, 2014)といった協同型学習を効果的に体育授業へ導入することによって、大学体育授業は更に社会人基礎力向上に貢献しうると考えられる。しかしながら、協同型学習を大学体育授業に導入することによって社会人基礎力の向上を報告した先行研究において、学習者の授業内行動は個人のパーソナリティに影響を受けやすい可能性を考察し(引原ほか, 2016; 金田・引原, 2018)、中山ほか(2011)は協同型学習の有効性が学習者のパーソナリティに大きく影響を受けることを報告している。また、社会人基礎力の評価は自己評価で実施され、その判断には個人のパーソナリティの影響が反映されることが考えられる(有光, 2001; 河内, 2004; 塗師, 2005; 鈴木, 2010)。そのため、社会人基礎力の結果を解釈する際には、対象者のパーソナリティ特性を考慮する必要があると考えられるが、現在までの研究報告からパーソナリティと社会人基礎力評価の関係を十分に検討できているとは言い難い。

このようなことから本研究では、自己評価で実施されるパーソナリティ調査の得点と社会人基礎力の評価得点の関係性に関する基礎資料を得ることを目的とした。これらの基礎資料は、パーソナリティと社会人基礎力評価の関係性を明らかにすることに寄与するだけに留まらず、

学習者ひとりひとりの教育効果を保証できる授業づくりなど、今後の大学体育の発展に応用可能となることが期待される。

方 法

1. 対象者

本研究の調査対象となった授業は、筆者らが所属する工業系大学の教養科目に位置づけられる「スポーツ科学」であり、受講者は大学1年生もしくは2年生であった。受講者462名に対して、第2回授業時にパーソナリティ調査および社会人基礎力調査を実施した。両調査は授業内で実施したが、全ての設問への回答を強制するものではなかった。年齢や性別の選択も自由意思で回答することとした。

本研究は、ヘルシンキ宣言に従い対象者の個人情報管理など人権擁護に配慮して実施された。特に、本研究に関わる質問紙調査は、授業内で実施したため、回答の有無および回答の結果が成績評価に一切影響しないことを説明した。また、本研究の目的、個人情報の保護、データの利用(収集したデータは平均値化などの処理を行い論文等で公表するが、個人としてのデータは一切公表されない)に関しても十分に説明した。

2. パーソナリティ調査

パーソナリティ調査は、村上・村上(1997)の作成した主要5因子性格検査を用いた。本研究で用いた主要5因子性格検査は、70項目からなり、外向性(社交的で、積極的に人と付き合い、流行などにも敏感な傾向)、協調性(親切で、暖かく、人と協調し、相手の立場で考える傾向)、良識性(自分を厳しく律し、仕事や勉強など精力的、計画的かつ徹底的に取り組む傾向)、情緒安定性(気楽で自信があり、義務的なことにもくつろいだ態度で臨み、困った問題が起きても動揺しないで冷静沈着に対応できる傾向)、知的好奇心(思慮深く、洗練され、広範囲の情報を知ったり体験したりすることに関心を持つ傾向)の5因子から構成される(村上・村上, 1997, 2018; 緒方, 2012)。

各項目に対し「はい」「いいえ」「わからない」で自己評価させ、得られた回答は主要5因子性格検査ハンドブック(村上・村上, 2018)に基づいて処理した。本研究の対象者における処理後の各因子得点範囲は、0点~12点であった。

3. 社会人基礎力評価

スポーツ科学受講者は、NPO法人日本インターンシップ推進協会が提供している社会人基礎力評価シートを参

表1. 社会人基礎力の各評価項目、能力要素および質問項目

評価項目	能力要素名	質問項目
前に踏み出す力 (アクション)	主体性 ：物事に進んで取り組む力	指示がなくても、やるべきことを自ら見つけて取り組んでいる 知識・技術を意欲的に身につけようとしている 他人が嫌がることも行っている
	働きかける力 ：他人に働きかけ巻き込む力	周囲の人々に、共に行動するよう声かけをしている 周囲の人々に、目的を共有する働きかけを進んでいる 周囲の人々と意識して協働している
	実行力 ：目的を設定し確実に行動する力	自らの目標を設定し、その達成に取り組んでいる 目標達成の手順、方法を考え、確実に進めている 困難に遭遇しても、粘り強く行動している
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力 ：現状を分析し目的や課題を明らかにする力	現状を的確に把握し分析している 分析結果をもとに問題点を見出している 取り組むべき課題を明確にしている
	計画力 ：課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	課題解決のための手順、方法を考え出している 手順、方法は、常に複数案を用意している 複数案の中から最適案を選択している
	創造力 ：新しい価値を生み出す力	常に新しい発想、考えを身につけるような行動をとっている 良い発想をするための方法を積極的に習得している 課題に対して新しい解決方法を考え出している
チームで働く力 (チームワーク)	発信力 ：自分の意見をわかりやすく伝える力	事前に話すポイントを整理している 要点を押さえて理路整然としている 相手の立場、気持ちを考えて話している
	傾聴力 ：相手の意見を丁寧に聞く力	相手に話しやすい雰囲気づくりをしている 相手の話を前向きに聞く態度を取って聞いている 適切なタイミングで質問している
	柔軟性 ：意見の違いや立場の違いを理解する力	自分の考え方、やり方にこだわらず、臨機応変に対応している 相手の意見や立場を尊重している 他人の意見、やり方を受け入れ、自己向上に活かしている
ストレス コントロール力 *別の表中では ストレス制御力	状況把握力 ：自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	自分の置かれた環境、状況をよく把握している 自分に課せられた役割・使命をきちんと自覚している 周囲の人々の役割・使命と自分との関係をよく認識している
	規律性 ：社会のルールや人との約束を守る力	社会のルール・マナーをよく守っている 約束したことは必ず守っている リーダーの指示に従い、集団行動をとっている
	ストレスコントロール力 ：ストレスの発生源に対応する力	ストレスに負けず、常に前向きな行動をとっている ストレスを成長のチャンスとして捉えている 自分なりのストレス解消法を考え実行している

照した質問紙（引原ほか，2016；金田・引原，2018；金田ほか，2020）を用いて自己評価を行った。本研究で用いた社会人基礎力評価質問紙は、各能力要素（12要素）における着眼点が3つの合計36項目から構成されており、5段階（100, 80, 60, 40, 0点）で自己評価されるものである。既存の5段階評価は尺度間隔が不均一のため、本研究では「周囲も明らかに認める行動がとれている」が5点、「行動がとれている」が4点、「どちらかといえばとれている」が3点、「どちらかといえばとれていない」が2点、「とれていない」が1点として評価した（引原ほか，2016；金田・引原，2018；金田ほか，2020）。各能力要素得点は、構成される3項目の合計点数とした（満点15点，表1参照）。

4. 分析方法

本研究の分析対象者は、受講者462名（男性367名，女性65名，未回答30名）のうちパーソナリティおよび社会人基礎力の両調査に協力を承諾し、マークシートの回答に不備のなかった者およびパーソナリティ調査における不応答（わからない）が4個以上、頻度（F）尺度が8点満点中5点以上の場合を排除した359名（有効回答率：77.7%）とした。

5. 統計処理

各パーソナリティ5因子得点および各社会人基礎力12能力要素得点の相関関係については、Spearman順位相関分析を用いて確認した。

社会人基礎力3能力（前に踏み出す力，考え抜く力，チームで働く力）をそれぞれ従属変数，パーソナリティ

による5因子(外向性, 協調性, 良識性, 情緒安定性, 知的好奇心)をそれぞれ独立変数として強制投入法による重回帰分析を行い, パーソナリティ因子と社会人基礎力の各3能力との関連の強さについても検討した. その際, 得られた重回帰モデルの残差の正規性を有していることを確認した. また, 独立変数間の多重共線性の有無については, VIF (Variance Inflation Factor) が10以上とした(吉田, 1987). 統計処理は, エクセル統計 (Bell Curve for Excel, Social Survey Research Information Co., Ltd) を用いた. 有意水準は, 5%未満とした.

結果

表2に分析対象者 (n = 359) のパーソナリティ5因子の平均得点を示す. また, 表3に各社会人基礎力12能力要素の平均得点を示す.

表4にパーソナリティ5因子得点と各社会人基礎力能力要素得点間の相関係数および統計処理の結果を示す.

表2. 主要5因子パーソナリティの得点 (満点12点)

	外向性	協調性	良識性	情緒安定性	知的好奇心
平均値	4.81	7.33	5.38	4.84	4.20
標準偏差	4.01	2.36	3.26	3.50	3.07

パーソナリティ5因子得点と各社会人基礎力能力要素得点間の相関係数において, 以下の関係を除いて有意な相関関係が認められた {パーソナリティの協調性と課題発見力 ($r_s = .085, p = .110$), 計画力 ($r_s = .091, p = .084$) およびパーソナリティの情緒安定性と主体性 ($r_s = -.063, p = .231$), 働きかけ力 ($r_s = .060, p = .258$), 実行力 ($r_s = .063, p = .237$), 課題発見力 ($r_s = .055, p = .299$), 計画力 ($r_s = -.028, p = .598$), 創造力 ($r_s = -.062, p = .238$), 発信力 ($r_s = .072, p = .171$), 柔軟性 ($r_s = .091, p = .085$), 規律性 ($r_s = .079, p = .134$)}.

次に, パーソナリティ5因子(外向性, 協調性, 良識性, 情緒安定性, 知的好奇心)が社会人基礎力に及ぼす影響を検討した. その際, 社会人基礎力12能力要素は, それぞれの上位概念である社会人基礎力3能力(前に踏み出す力, 考え抜く力, チームで働く力)にまとめられることから, 能力要素間で類似要素が存在する可能性を考慮して, 社会人基礎力3能力の得点を従属変数, パーソナリティ5因子の得点を独立変数とした強制投入法による重回帰分析を行った. 表5には, 分析によって得られた調整済み重決定係数 (R^2) および調整済み標準偏回帰係数 (β) を示す. R^2 の値は, 前に踏み出す力 .369, 考え抜く力 .273, チームで働く力 .297であり, 社会人基礎

表3. 社会人基礎力能力要素の得点 (満点15点)

	平均値	標準偏差	パーセンタイル		
			25	中央値	75
主体性	9.29	2.04	8	9	11
働きかける力	8.66	2.48	7	9	10
実行力	9.33	2.50	7	9	11
課題発見力	9.32	2.24	8	9	11
計画力	8.71	2.45	7	9	10
創造力	8.55	2.50	7	9	10
発信力	9.33	2.27	8	9	11
傾聴力	10.08	2.36	8	10	12
柔軟性	10.27	2.24	9	10	12
状況把握力	9.93	2.22	8	10	12
規律性	11.08	2.24	10	11	13
ストレス制御力	9.18	2.72	7	9	11

表4. 主要5因子パーソナリティ得点と社会人基礎力能力要素得点の相関関係

	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレス制御力
外向性	r = .331 p < .001	r = .455 p < .001	r = .230 p < .001	r = .206 p < .001	r = .216 p < .001	r = .274 p < .001	r = .327 p < .001	r = .393 p < .001	r = .250 p < .001	r = .333 p < .001	r = .202 p < .001	r = .312 p < .001
協調性	r = .227 p < .001	r = .351 p < .001	r = .190 p < .001	r = .085 n.s.	r = .091 n.s.	r = .132 p < .05	r = .210 p < .001	r = .305 p < .001	r = .387 p < .001	r = .288 p < .001	r = .290 p < .001	r = .305 p < .001
良識性	r = .387 p < .001	r = .304 p < .001	r = .506 p < .001	r = .336 p < .001	r = .338 p < .001	r = .230 p < .001	r = .348 p < .001	r = .287 p < .001	r = .310 p < .001	r = .313 p < .001	r = .341 p < .001	r = .301 p < .001
情緒安定性	r = -.063 n.s.	r = .060 n.s.	r = .063 n.s.	r = .055 n.s.	r = -.028 n.s.	r = -.062 n.s.	r = .072 n.s.	r = .193 p < .001	r = .091 n.s.	r = .118 p < .05	r = .079 n.s.	r = .168 p < .01
知的好奇心	r = .363 p < .001	r = .307 p < .001	r = .360 p < .001	r = .458 p < .001	r = .378 p < .001	r = .319 p < .001	r = .329 p < .001	r = .320 p < .001	r = .300 p < .001	r = .304 p < .001	r = .174 p < .001	r = .228 p < .001

表5. パーソナリティ得点と社会人基礎力3能力得点の重回帰分析の結果

	従属変数			VIF	
	前に踏み出す力 (action)	考え抜く力 (thinking)	チームで働く力 (teamwork)		
独立変数	外向性	.270**	.153**	.213**	1.36
	協調性	.092	-.051	.214**	1.26
	良識性	.347**	.215**	.236**	1.34
	情緒安定性	-.101*	-.148**	.040	1.10
	知的好奇心	.168**	.356**	.116*	1.37
		R ² = .369	R ² = .273	R ² = .297	
表内の数値は標準偏回帰係数 (β)		*p < .05	**p < .01		

力3能力の得点についてパーソナリティ5因子の得点が約27%–約37%を予測可能であることが示された。また、β値に関して、「前に踏み出す力」では、良識性(β=.347)、外向性(β=.270)、知的好奇心(β=.168)が有意な正の影響を与え、情緒安定性(β=-.101)が有意な負の影響を与えていた。「考え抜く力」では、知的好奇心(β=.356)、良識性(β=.215)、外向性(β=.153)が有意な正の影響を与え、情緒安定性(β=-.148)が有意な負の影響を与えていた。「チームで働く力」では、良識性(β=.236)、協調性(β=.214)、外向性(β=.213)、知的好奇心(β=.116)が有意な正の影響を与えていた。独立変数間(パーソナリティ因子間)の多重共線性診断の結果、各独立変数間に多重共線性は認められなかった(表5参照)。

考察

1. パーソナリティ因子と社会人基礎力能力要素の相関関係

本研究の目的は、パーソナリティ主要5因子の自己評価得点と社会人基礎力能力要素の自己評価得点との関係性を調査することであったため、はじめに全分析対象者(359名)の両得点の相関関係を確認した。その結果、パーソナリティ因子の「外向性」「良識性」「知的好奇心」は、社会人基礎力12能力要素すべてと有意な相関関係が認められた。特に、外向性と働きかけ力($r_s = .455$)、良識性と実行力($r_s = .506$)、知的好奇心と課題発見力($r_s = .458$)で中程度の相関関係が確認された。また、「協調性」は課題発見力、計画力を除いた10能力要素と有意な相関関係が認められた。これらの結果は、田島ほか(2016)の結果を支持するものであり、パーソナリティ特性と社会人基礎力能力要素の関連性を示唆する。一方で「情緒安定性」は傾聴力、状況把握力、ストレスコントロール力を除く9能力要素と有意な相関関係が認められなかった。この結果に関して、田島ほか(2016)の報告を参考にすれば、情緒安定性は素質として捉えられる側面と一時的な気分として捉えられる側面があり、社会人基礎力がこれまでの経験などの積み重ねによって形成される能

力(大倉, 2014)と考えるならば、一時的な側面を持つ情緒安定性との関連が認められにくいと考えることができるかもしれない。

これらの結果から、ガイダンスなどの授業開始時に、受講生のパーソナリティを確認し、パーソナリティを考慮に入れたグループ編成や個人の授業内活動に対するより適切な助言が可能になることが考えられる。また、受講者のパーソナリティを考慮した授業運営に関する知見が集積していくことで、受講者ひとりひとりに対する教育効果の保証へとつながっていくことが期待される。

2. パーソナリティ因子の社会人基礎力3能力に対する影響

本研究における重回帰分析で得られた決定係数(R²)の値は、前に踏み出す力.369、考え抜く力.273、チームで働く力.297であり、社会人基礎力3能力の得点についてパーソナリティ5因子の得点が約27%–約37%を予測可能であることが明らかになった。この結果から、社会人基礎力を授業効果の指標として用いる場合、分析対象者のパーソナリティ特性を考慮することが必要であるものと考えられる。また、本研究において、「前に踏み出す力」へは良識性、外向性、知的好奇心に有意な正の関連が確認され、中でも良識性の寄与度が高かった。「考え抜く力」には知的好奇心、良識性、外向性に有意な正の関連が確認され、中でも知的好奇心の寄与度が高かった。一方、「チームで働く力」には良識性、協調性、外向性、知的好奇心に有意な正の関連が確認されたが、各変数の寄与度は近似していた。また、「前に踏み出す力」と「考え抜く力」には情緒安定性に有意な負の関連が確認された。先行研究による報告では、「前に踏み出す力」に対して外向性および開放性(本研究の知的好奇心と関連)が正の有意なパスを示し、「考え抜く力」に対して開放性と誠実性(本研究の良識性と関連)が正の有意なパスを示し、「チームで働く力」に対して協調性、誠実性、開放性が正の有意なパスを示した(田島ほか2016)。これらのことから、調査対象者が異なるものの先行研究(田島ほか, 2016)の結果と本研究の結果において、いくつかの

共通した結果が確認されたことを考慮すれば、パーソナリティ特性は社会人基礎力の3能力得点に影響を与えることが示唆されるものと考えられる。村上・村上(2018)の解釈によると、良識性は計画性や責任感、能率的、正確さ、知的好奇心は分析的や想像的、思慮深い、知性的ということであり、これらのパーソナリティ要素が「前に踏み出す力」および「考え抜く力」の得点にそれぞれ影響を与えていたと考えられる。情緒安定性に関して、「前に踏み出す力」および「考え抜く力」に対し、 β 値はそれほど高くないが有意な負の影響を与えていた。情緒安定性の得点が低いことは、ネガティブな物事に対する感度が高く、小さな疑念も見逃せないと解釈できる。また、「前に踏み出す力」は主体性・働きかける力・実行力、「考え抜く力」は課題発見力・計画力・創造力で構成されている。これらのことを考慮すれば、「前に踏み出す力」にはネガティブ感度の高さが影響し、「考え抜く力」には詳細まで見逃さないパーソナリティが影響したものと考えられるかもしれない。先行研究と本研究の共通した結果より、「前に踏み出す力」には外向性および知的好奇心、「考え抜く力」には良識性および知的好奇心、「チームで働く力」には良識性、協調性、知的好奇心が影響を及ぼすことが示唆された。

3. パーソナリティ特性を考慮した大学体育授業の可能性と今後の課題

近年、社会人基礎力向上における大学体育授業の効果が確認され、特にTBLやPBLといった協同型学習の有効性が報告されている(引原ほか, 2016; 金田・引原, 2018)。しかしながら、これら先行研究での報告は、大学体育授業の受講者平均で論じられているものであり、受講者ひとりひとりの教育効果を保証するものではない。先行研究において、協同型学習のように能動的・協力的かつ積極的な授業参加が重要な学習形態には、学習者のパーソナリティ特性が学習効果に影響を与えることを報告している(中山ほか, 2011)。小平ほか(2018)は児童を対象にした報告であるが、良識性および協調性は注視および傾聴の予測因であること、発言行動には外向性だけでなく知的好奇心も促進要因であることを示している。大学生を対象にした本研究においても、社会人基礎力能力要素の傾聴力および注視に対応すると考えられる状況把握力を含む「チームで働く力」に対し良識性および協調性が有意に正の影響を示し、先行研究を支持する結果であった。また、学習上のつまずきにもパーソナリティが影響を及ぼすことが報告されている。関・安納(2017)は、能動的で協力的な授業参加を目指す学習方法において、東大式エゴグラムによる「活発的な性格」の学生は

学習方法における言葉の理解につまずき、学習方法などの難しい言葉をより分かりやすく説明する必要があること、「いい加減な性格」の学生は発表課題につまずいていることから個人発表で負荷が大きい場合にはグループ発表などの工夫が必要であることを指摘している。また、あらゆる学習行動に重要な影響を与える動機づけ(Asghar Hazrati-Viari et al., 2012)は、パーソナリティ因子の良識性と深いかかわりを持つことが報告されている(Chamorro-Premuzic and Furnham, 2003)。さらに、サマーキャンプのような体験型学習を通じた社会情動的スキルの獲得においては、学習者パーソナリティの違いによってプログラムの効果が異なることも示唆されている(中野ほか, 2020)。これらの先行研究からもTBLやPBLといった協同型学習を運営する際、発言行動や傾聴、学習上のつまずき、プログラムの効果に対するパーソナリティの影響を考慮することの必要性を考えさせられる。本研究の結果は、パーソナリティと社会人基礎力能力要素に相関関係を認め、パーソナリティが社会人基礎力3能力に影響を及ぼすことを示唆した。これらの結果は、社会人基礎力の向上に協同型学習が有効である(引原ほか, 2016; 金田・引原, 2018; 金田ほか, 2020)ことから、パーソナリティ特性を考慮に入れた協同型学習を効果的に大学体育授業に取り入れることが、個人レベルでの教育効果の保証へと導く可能性を有するかもしれない。今後の課題として、本研究はパーソナリティ特性と社会人基礎力の自己評価得点の関連を調査したに過ぎず、パーソナリティ特性と大学体育授業受講前後による教育効果(社会人基礎力の得点変化量)の関連性を検証する必要がある。今後、受講生ひとりひとりに対する教育効果を保証できるような授業運営が求められることを考えれば、パーソナリティ特性を考慮した大学教養体育は、その価値や意義の更なる発展を可能にすると考えられ、非常に重要な方向性のひとつかもしれない。

まとめ

本研究は、大学体育受講者のパーソナリティ特性と社会人基礎力の自己評価得点の関連性を調査し、基礎資料を得ることを目的とした。パーソナリティ主要5因子の各因子得点と社会人基礎力12能力要素得点の相関関係を確認し、「外向性」「良識性」「知的好奇心」は全12能力要素、「協調性」は10能力要素と有意な相関関係が認められた。パーソナリティ主要5因子の得点が社会人基礎力3能力(前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力)の得点に及ぼす影響について重回帰分析を用いて確認したところ、パーソナリティ主要5因子得点により従属変数の約27% - 約37%を予測可能であることが示された。

また、「前に踏み出す力」へ良識性、外向性、知的好奇心が、「考え抜く力」へ知的好奇心、良識性、外向性が、「チームで働く力」へ良識性、協調性、外向性、知的好奇心が有意な正の影響を与えており、「前に踏み出す力」と「考え抜く力」へ情緒安定性が有意な負の影響を与えていた。これらの結果より、主要5因子パーソナリティ特性と社会人基礎力12能力要素との関連性が示唆され、「前に踏み出す力」には良識性が、「考え抜く力」には知的好奇心が特に影響していることが明らかになった。

文献

- 有光興記(2001) 罪悪感、羞恥心と性格特性の関係. 性格心理学研究, 9(2): 71-86.
- Chamorro-Premuzic, T. and Furnham A. (2003) Personality predicts academic performance: Evidence from two longitudinal university samples. *Journal of Research in Personality*, 37: 319-338.
- 林直亨・宮本忠吉(2009) 週1回の大学授業における筋力トレーニングが筋力に与える影響. 体育学研究, 54: 137-143.
- Hazrati-Viari, A., Rad, A. T., and Torabi, S. S. (2012) The effect of personality traits on academic performance: The mediating role academic motivation. *Social and Behavioral Science*, 32: 367-371.
- 引原有輝・森田啓・若林斉・金田晃一(2016) 実技種目の異なる大学体育授業が社会人基礎力の育成に及ぼす影響. 大学体育学, 13: 16-25.
- 飯田路佳・青木己奈・田中安理・多田五月・井村祥子・伊坪有紀子(2016) 大学体育授業における成長度の自己評価～社会人基礎力を指標として～. 第4回大学体育研究フォーラム抄録集, 34.
- 石道峰典・西脇雅人・中村友浩(2015) 選択科目の体育実技授業を履修する大学生の社会人基礎力の特徴について. 大学体育研究, 37: 1-10.
- 石道峰典・西脇雅人・中村友浩(2016) 体育実技授業における社会人基礎力育成を意図した介入効果の検証. 大学体育学, 13: 26-34.
- 石道峰典・西脇雅人・中村友浩(2017) 体育実技授業による visual analog scale (VAS) 法を用いた社会人基礎力の評価に関する検討. 大学体育学, 14: 67-78.
- 石倉恵介・佐藤和・富川理充(2017) 週一回の大学体育授業におけるトレーニングが身体に及ぼす影響. 専修大学スポーツ研究所紀要, 42: 21-29.
- 金田晃一・引原有輝(2018) 学外活動を伴う集中型の大学体育授業が受講学生の社会人基礎力におよぼす影響: ゴルフ種目を対象に. 大学体育学, 15: 22-30.
- 金田晃一・引原有輝・佐藤和・川西範明・森田啓(2020) 大学教養教育としての大学体育の位置づけに関する一考察: 某工業系大学を例に. 大学教育学会誌, 41(2): 35-44.
- 河内和直(2004) 自己評価の維持・高揚に及ぼすパーソナリティ特性の影響. 日本パーソナリティ心理学会発表抄録集, 13: 68-69.
- 経済産業省(2006) 社会人基礎力. <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>, (参照日2021年2月24日)
- 小平英志・布施光代・安藤史高(2018) 児童のパーソナリティと積極的授業参加行動—主要5因子性格検査を用いた検討—. 日本福祉大学子ども発達学論集, 10: 39-47.
- 溝上慎一(2007) アクティブ・ラーニング導入の実践的課題. 名古屋高等教育研究, 7: 267-287.
- 村上宣寛・村上千恵子(1997) 主要5因子性格検査の尺度構成. 性格心理学研究, 6: 29-39.
- 村上宣寛・村上千恵子(2018) 主要5因子性格検査ハンドブック—性格測定の基礎から主要5因子の世界へ三訂版. 筑摩書房.
- 中越元子・野原幸男・林正彦・川口基一郎・山崎洋次(2014) チーム基盤学習(TBL)と問題基盤型学習(PBL)を統合した授業「プレゼンテーション」の実践. 京都大学高等教育研究, 20: 17-29.
- 中野生子・田中聡・池田めぐみ・山内祐平(2020) 個人特性に着目した社会情動的スキルの評価—UWC ISAK Japanのサマースクールを事例として—. 日本教育工学会論文誌, 44(1): 23-35.
- 中山晃・高木正則・勅使河原可海(2011) 全員参加型の協調学習のための性格を考慮したグループ編成方法の研究. 情報処理学会研究報告 DPS-146, 33: 1-6.
- 中澤史・上野雄己(2016) スポーツ演習による受講生の社会的スキル向上効果に関する検討. 法政大学スポーツ研究センター紀要, 34: 1-4.
- 野口和行・村山光義・板垣悦子・東海林祐子(2015) 体育実技受講学生の社会的スキル及び自己効力感の変容に関する検討: 授業形態の違いによる比較. 体育研究所紀要, 54(1): 9-16.
- 塗師斌(2005) 自尊感情と性格および感情の関係. 横浜国立大学教育人間科学部紀要1教育科学, 7: 107-114.
- 緒方康介(2012) 被虐待児における Big Five パーソナリティ特性の分析. パーソナリティ研究, 22(1): 84-86.
- 尾原喜美子(2009) チーム基盤学習(team-based learning TBL)の紹介. 高知大学看護学会誌, 3: 37-44.
- 大倉真人(2014) 「社会人基礎力」育成のための教育プログラム—「ゆるキャラ作成」を題材として—. 経営と経済(長崎大学経済学部紀要), 94: 41-56.
- 笹原妃佐子・大岩雅子・河村誠・笹原英夫(2006) 大学における体育の意義について. 大学体育学, 3: 15-23.
- 関見伸・安納佳子(2017) 開発・参加型 GIS 教育における性格別による学習上のつまづきの特徴の解明. 土木学会論文集 H(教育), 73(1): 12-21.
- 篠田邦彦(2003) あいまいな教養の体育—ディシプリンと教育は誰のために、何をめざしたのか—. 体育原理研究, 33: 106-112.
- 鈴木有美(2010) 「他人を見下す若者たち」の性格的特徴—仮想的有能感と5因子性格検査の関連—. 瀬木学園紀要, 4: 66-71.
- 須崎康臣・杉山佳生(2017) 大学生を対象とした体育授業における自己調整学習方略と体育自己効力感を促すための介入プログラムの効果. 体育学研究, 62: 227-239.
- 田島祐奈・岩瀧大樹・山崎洋史(2016) 女子大学生における進路選択に対する自己効力および社会人基礎力の研究. 学苑・人間社会学部紀要, 904: 10-20.
- 東海林祐子・永野智久・加藤貴昭・佐々木三男・島本好平(2012) 大学体育授業がライフスキルの獲得に与える影響.

KEIO SFC JOURNAL, 12 (2) : 89-108.

東海林祐子・島本好平 (2017) 大学体育におけるライフスキル獲得のための授業支援ツール体育ノートの導入とその効果の検討. 大学体育学, 14 : 3-15.

内田英二・神林勲 (2006) 週1回8週間のサーキットトレーニングが大学生の体力および感情に与える影響. 体育学研究, 51 : 11-20.

山内賢 (2016) 慶応義塾大学体育実技「フィットネストレーニ

ング」履修者における骨格筋量と筋力トレーニング種目別最大筋力 (1RM) の実態調査報告. 体育研究所紀要, 55 (1) : 17-23.

吉田光雄 (1987) 重回帰分析における多重共線性と Ridge 回帰について. 大阪大学人間科学部紀要, 13 : 227-242.

(受付 : 2020. 11. 20, 受理 : 2021. 6. 18)



The relationship between personality characteristics and the fundamental competencies for working persons in the physical education class for liberal arts

Yamato SATO¹, Yuki HIKIHARA¹, and Koichi KANEDA²

¹Faculty of Creative Engineering, Chiba Institute of Technology,

²Faculty of Advanced Engineering, Chiba Institute of Technology

Abstract

It has been reported that physical education for liberal arts enhances the fundamental competencies of working persons (FCWP) by effective implementation of cooperative and collaborative learning. Previous studies have reported that the effectiveness of cooperative and collaborative learning is largely dependent on the personality of learners. However, the relation between personality and FCWP has yet to be clarified. Consequently, the purpose of this study was to amass data on the relation between the Big Five personality traits test and the FCWP scores. Participants included 359 students in the physical education class for liberal arts. First, the correlation between scores of the Big Five personality traits and those of the 12 skill factors of FCWP was confirmed. Significant correlation was found between the personality factor scores for “extraversion” “conscientiousness” “intellectual curiosity” and all the skill factors of FCWP as well as “agreeableness” and 10 skill factors of FCWP (excluding problem-finding ability and planning ability). Subsequently, in order to examine the influence of the Big Five personality traits on the FCWP scores, a multiple regression analysis was conducted, with the scores of three competencies (action, thinking, and teamwork) as the dependent variable and the personality scores as the independent variable. The results revealed that the scores of Big Five personality traits moderately predicted each competency ($R^2 = .27$ to $.37$). In addition, there were significant positive effects of extraversion, intellectual curiosity, and in particular, conscientiousness on “action”. Furthermore, there were significant positive effects of conscientiousness, extraversion, and in particular, intellectual curiosity on “thinking”. There were also significant positive effects of conscientiousness, agreeableness, extraversion, and intellectual curiosity on “teamwork”. Finally, there were significant negative effects of neuroticism on “action” and “thinking.” These results suggest that there is a relationship between the Big Five personality traits and FCWP. In the future, it is necessary to verify a relationship between the personality traits and educational effect of physical education for liberal arts.

Keywords

fundamental competencies of working persons, personality, cooperative and collaborative learning

Corresponding author: Yamato SATO Email: yamato.sato@p.chibakoudai.jp